

## 第5章. 現象思考学の活用と展開

第五章では、現象思考学に則って、意味を掴みにいくことから見えてくる幾つかの事柄について論じていこうと思う。前章までに、湯川博士の中間子理論を対象とした高尚なものと、油煙の成分を抽出する装置のトラブルを対象とした身近なものについて紹介した。さらに幾つかの事柄を対象に、現象思考学の活用と展開を紹介していく。

### 1) 著名な言葉の意味を現象思考学で捉えてみる

経営学の巨人、ピーター・ドラッカーの言動について次のようなことが伝えられている。

世界の政治家にしろ、経営者にしろ、マーケターにしろ、みんな将来を正確に予想したいと思っている。しかし、それはなかなかうまくいかない。これに関して彼は次のように考えた。

彼は将来を知る方法を見つけるため、2つの仮説を立てた。

- 1) 未来は知り得ない。
- 2) 未来は、現在存在するものとも、我々が予想するものとも異なるものになる。

この仮説に基づいて、彼は次のように未来を捉えた。

- ・将来起きる未知の出来事を考えて、今決断を下しても必ず失敗する。
- ・既に起きた出来事がもたらす将来の効果を予想することはできる。

即ち、将来起きる出来事と、既に起きた出来事が将来に及ぼす効果とを明確に区別したのだ。

彼は色々な予想をした。そして、彼の予想通りになったことは多かった。その理由を問われた時の彼の答は、次のようなものだった。

「私は単に窓の外を見て、自分が見たこと、既に起きた出来事が将来にとって意味することを考える。ほとんどの人は窓の外を見ることさえしない。仮に見たとしても、こうした出来事が招く明白な結果について考えることに時間を割かない。」

以上のようなドラッカーの言動に見えていることは、その気になってきちんとやれば、ある程度の精度をもって将来を予想することは誰にでもできるということだ。そして、こうしたドラッカーの言動はまさに現象思考学的だ。

「既に起きた出来事がもたらす将来の効果を予想する」、「自分が見たこと、既に起きた出来事が将来にとって意味することを考える」といった思考と行動は、「現象の集まり」が表現している意味を読み取る、という現象思考学の基本行動を根底に持っているを受け止めることができる。

哲学者ニーチェの言葉に「事実というものは存在しない。存在するのは解釈だけである。」というものがある。よく知られている著名な哲学者の発言ゆえ、言葉通りに受け取ればよいのであろう。次のような受け止め方が一般的だろう。

- ・ 事実とは、事実としてアприオリに存在するのではなく、ある現象や物事に関してある人が何らかの解釈を行うことによって、現れている現象や物事を事実として確定させるものだ。即ち、直接的な存在ではなく、間接的な概念に過ぎない。
- ・ 事実と呼ばれているものは、解釈次第でいくらでも変化し得るものだ。
- ・ 私たちの周囲に存在すると思われているあらゆる事実は、本当は全てあやふやなものであり、解釈次第で事実にもそうでないものにも成り得る。私たちは混沌たる不確定の大海の中で右往左往しているだけの存在なのだ。

物事の根源を究めようとする哲学者の立場ではなく、私たちが生きる世界の中での生活者の立場でこの言葉を考えてみようと思う。

解釈の前段階には知覚がある。現象や物事を知覚することが無ければ、解釈という行為はあり得ない。即ち、解釈とは「現象の集まり」に対する行為であり、「現象の集まり」が表現している意味を読み取ることに他ならない。

ニーチェが解釈と呼んだものは、「現象の集まり」が表現する意味のことだ。これは事実ではないことは明らかであり、あくまでも意味なのだ。場合によっては“本質”と呼ばれることもある。

事実という言葉で呼ぶに相応しい対象は、むしろ知覚される現象や物事である。こうした考察を通して言えることは、私たちが生きる世界の中では、このニーチェの言葉は破綻しているということだ。ニーチェが言いたかったことは、「事実と呼ばれるものは存在しない。存在するのは感覚により知覚されるものだけだ」ということではないだろうか。

仏教の言葉に「因縁」というものがある。“因”と“縁”とを合わせた言葉だ。

因縁の一般的解釈としては、「因は直接の原因、縁は間接の原因」とある。そして、「一切の事象は、この因・縁が相合して成る、というのが仏教の基本的な考え方」とある。

この“因縁論”を工学の分野に取り込んだ工学者が居る。鉄道車両の台車の研究を長く続けてこられ、後に龍谷大学の教授になられた中村宏氏である。車軸の疲労破壊に関する同氏の解説がきわめてユニークであり腹に落ちるものであった。

- ・疲労破壊が起こるのは“因”があるからだ。
- ・何らかの“縁”に遭遇して現れる、その因から起こる現象が疲労破壊なのだ。

例えば、車軸の内部に小さな欠陥があったとする。それだけでは疲労破壊が起こることはない。この車軸を取り付けた車両が長期間にわたって運転され、運転時間の累積がある量を超えた時に疲労破壊が発生する。

車軸の内部にあった小さな欠陥が因であり、運転時間の累積がある量を超えたことが縁だということだ。

ここで重要なことは、因があれば必ず起こるとは言えないことだ。即ち、因を知覚した際に、単純な因果律を適用してある現象が起こると断定してはいけないのである。こうした時に必要なことは、因に関連して過去に発生した現象（単なる現象だけではなく、人々の経験、研究、伝承なども含む）も合わせて「現象の集まり」として捉え、これが表現する意味を掴みに行くことなのである。

このように現象思考学を活用することによって、因があるからといって即座にそれを廃棄したりすることが無くなる。「現象の集まり」が表現する意味の把握から、縁に遭遇する条件が予想され、適切な使い方が見出されるということになる。

## 2) 論理的思考と科学的思考

論理的思考と科学的思考と呼ばれるものについて考えるために、先ず、簡潔な定義を試みる。

- ・論理的思考  
さまざまな分野主張のまとまりを、たんに矛盾していないというだけでなく、  
妥当な根拠付けの下に、組み立てようとする思考
- ・科学的思考  
関係するさまざまな現象と物事の相互関係を知り、正しく分析し、その観察

データからの推論によって仮説を立て、それを検証していった結論を見出そうとする思考

私たちが生きる世界には様々な現象が満ち溢れている。これらの現象の間には多様な関わりが存在している。私たちはこの世界の中で現象を知覚し、知覚した現象の間の関わりを意味として捉える。

この意味を矛盾なく受け止めることができることもあれば、そうでないこともある。また、この意味が妥当だという根拠が得られることもあれば、そうでないこともある。論理的思考は、矛盾を含むことや根拠が得られないことを排除する。

論理的思考を前面に押し出せば、現象の間の関わりに関する特異な発想や斬新な発想は排除の対象となってしまう。即ち、論理的思考は、私たちの思考が飛躍することに対するある種の制約となるのである。

論理的思考の良いところは、多くの現象が知覚されて混乱した状況の中で、今何がどうなっているかを整理し把握する上で極めて有効な手段となることだ。状況や物事を自分が理解するためにも、他者に対して説明するためにも、次を取るべき行動を考えるためにも、これが大きな力になることは間違いない。

それだけではない。いま何が分かっているかが分かっているかを知る上でも論理的思考を欠くことはできない。構造化という言葉がよく使われるが、これは論理的思考のための具体的手段の一つである。

上記に見るような論理的思考の特性からさらに踏み込んで、科学的思考について考えてみる。科学的思考を形作るものの一つに論理的思考があることは疑いのないことだが、この二つは同じものではない。

科学的思考の特徴は、仮説の設定と再現性の保証にあると言える。科学者たちは未知の現象に触れて、それがどのようにして起こるのか、何故起こるのかを探求する。その探求の過程で緻密な観察や実験を行い、そこで得られた現象や現象に関する情報に基づいて、こういう原因からこういう風にしてその現象が起こるのだろうと考える。

これはまさに、「現象の集まり」が表現する意味を読み取った結果であり、仮説と呼ばれる。仮説とは、様々な「現象の集まり」が表現する意味を読み取った結果なのである。

仮説を設定した後には、その仮説が当を得ていることを証明するために、さらに緻密な観察と実験を重ねる。その結果、誰もが納得のいく証明ができれば、仮説は法則や理論として確立される。証明ができない場合には、その仮説は否定されることになり、

新たな仮説を探すことになる。

仮説を設定する際にも仮説を証明する際にも、論理的思考が機能している。そして、こうした一連の思考の根本を成すのが、「現象の集まり」が表現している意味を読み取ることなのだ。

もう一つの特徴である再現性の保証について考えてみる。仮説が法則や理論として確立されるということは、同じ条件の下であれば、他の誰が観察したり実験したりしても、同じ結果が得られることが保証されるということだ。それは、その仮説の基軸となる、現象や物事から成る「現象の集まり」が構成され、これが表現している意味を、万人が受容することを意味している。これが再現性の保証である。

科学的思考とは以上のようなものであり、その基盤には現象思考学の存在を認めることができる、と言っても過言ではないだろう。

### 3) デカルトの方法序説を現象思考学の視点で読んでみると

方法序説の再読していて思い浮かんだことがあった。それは、デカルトの探究の成果と、彼の探究の過程における思考と行動とを合わせて考え、デカルトの思想が生まれたプロセスを総合的に捉えることを試みようという思いだ。その方法は、知覚できる全ての現象の集合が表現する意味を探し求めるというやり方だ。

現象とは、デカルトが到達した命題や観念、それに到る過程で彼が得たこと、行動したこと、そういったことが成された環境や状況、関係が無いかもしれないが同時性を持って起こっていたこと、等々目の前に現れている全てのことだ。こうした試みを通して、これまで捉えられなかった色々なことが浮かび上がってきた。

偉大なる命題「われ惟う、故にわれ在り」は、デカルトが最高の価値を置く理性による演繹的思考のみから生まれたのだろうか。実はそうではなさそうだ。彼は炉部屋でも、旅の中でも、オランダでの探究の中でも、きわめて多くの現象に触れていた。そして、彼の理性に照らして何の疑いもなく受け入れるものと、何らかの疑いを感じるものとを認識している。そればかりか、そんな状態にある自分の存在は一体何なのだという疑問まで持つ。

こうした多くの現象が織り成す状態をどう捉えるのが適切なのだろうか、という自己に対する問い掛けが彼の中には在ったはずだ。意識の上でも無意識下でも、彼はその答を追求していたのだろう。その答えがこの偉大なる命題だったと言えるだろう。この偉大なる命題は、デカルトを取り巻く膨大な数と量の「現象の集まり」が、表現している意味に他ならなかった、と言えるのだ。

このように受け止めると、偉大なる命題の背景にあるものが透けて見えてくる。  
“われ惟う”は絶対的に重要だ。しかし、“われ惟う”が実体のある世界に位置付けられるためには、現象が知覚されるという基盤が必要だ。

知覚は、相手や対象から何かを受け取ること、および相手や対象に何かを働きかけることで成り立つ。自分だけではなく、全ての相手や対象も現象を知覚している。即ち、知覚とは双方向の働きだと言える。こうした知覚を表現する言葉としては、“交感”が適切かもしれない。

このように考えると、“われ交感す、故にわれ在り”という仮命題を身近に感じることができる。デカルトの思考と行動のプロセスをたどってみても、この仮命題の存在を感じることができる。

#### 4) 意味についての掘り下げ

「現象の集まり」が表現している意味には、静的な意味と動的な意味との二種類を認めることができる。静的な意味とは、複数の現象のつながりや関係性の中に見える形や相、あるいは構造といったものだ。

動的な意味とは、「現象の集まり」の中に捉えることができる変化のことだ。時間軸の上である現象が消えて別の現象が現れることもある。このように「現象の集まり」が時間軸に沿って変わっていくことが表現している意味は動的な意味だと言える。さらに、静的な意味の時間軸上の変化が表現している意味も動的な意味だと言える。

「現象の集まり」が表現している意味を読み取るには、この静的な意味と動的な意味との両方を掴みにいくことが必要だ。これを意味を読み取る第一ステップと呼ぶことにする。

問題解決とか状況への対処とは何かを変えることだ。従って、適切な答とか施策とは適切な対象を適切に変えることを示すものだと言える。意味を読み取る第一ステップを通して問題や状況を適切に把握してこそ、何をどのように変えるのがよいかを見出すこと、即ち仮説を立てることができる。これを意味を読み取る第二ステップと呼ぶことにする。

第二ステップで生まれた仮説を実行すると、新しい現象が追加されて「現象の集まり」が変わり、その表現する意味も違ったものになる。そこで再び第一ステップに戻って新しい意味を読み取りにいくことになる。最適の問題解決とか状況への対処というのは、こうしたことを繰り返して得られるのである。

現象思考学は、崇高な抽象的な哲学的概念ではない。私たちが生きる世界の中で、私たちが生きるために駆使できる思考と行動の方法である。生きていく中で、自分が置かれている状況を掴む上でも、自分の姿勢を意識して捉える上でも、自分の行動を選択する上でも、現象思考学は期待に沿うことができるだろう。本章の事例や、以前の章で引き合いに出した事例などから、現象思考学のような活用と展開を理解していただけたらと考えている。

(完)